

山形から

——インターネットは地域を活性化する

世界へ

情報発信能力を身につけるために

否応なく進展する情報社会化の流れに無縁では生きられない以上、一人ひとりの情報活用能力を高めなくてはならぬと、いまマルチメディアをめぐる全国各地でさまざまな活動が展開されている。中でもインターネットで地域を活性化しようという動きが盛んだ。これも、インターネットが直接自前の情報を発信でき、その効果も直接的で大きいからだろう。とはいえ、やはりその世界を泳ぐには、最初に泳ぎ方を指南してくれる人がいたほう



モダンな建物が目をひく 東北芸術工科大学

が話が早い。そこで活躍するのが、各地域に存在する大学である。

例えば、東北芸術工科大学では、ホームページづくりを通してインターネットを身近なものにしてもらおうと、学内を市民に開放、市民と学生が共に学びあう場として寺子屋方式の「ネットフォーラム」を開設している。県内あちこちに意識的な拠点をつくり、それをつないで地域全体を強力な情報発信力を持つ存在にすることが狙いという、情報デザイン学科の端山貢明教授に、フォーラムの様子を見せていただいた。

「多様な年齢層の人々が集まって、社会の情報化を考える場に」との趣旨で始まったこのフォーラムは、今年で三年目になる。週に一回のこのフォーラム、当初は授業の一環として行っていたので学生たちには単位を与えていたそうだが、準備期間を過ぎた今年からは、一般市民や学内職員と同じく学生たちも自由参加になった。当然、参加者は少なくなつたが「それだけに、意欲のある学生たちばかりですから、期待できますよ」と端山先生。毎年、中高年を中心に少なからぬ市民の参加があつたが、今年は「子どもと一緒にインターネット」とテーマを決め、小学生とホームページづくりをすることにしたので、フォーラムへの市民の参加は小学校の先生のみとか。

山形から

インターネットは地域を活性化させる

世界へ

情報発信能力を身につけるために

否応なく進展する情報社会の流れに無縁では生きられない以上、一人ひとりの情報活用能力を高めなくてはならぬと、いまマルチメディアをめぐる全国各地でさまざまな活動が展開されている。中でもインターネットで地域を活性化しようという動きが盛んだ。これも、インターネットが直接自前の情報を発信でき、その効果も直接的で大きいからだろう。とはいえ、やはりその世界を泳ぐには、最初に泳ぎ方を指南してくれる人がいたほう

が話が早い。そこで活躍するのが、各地域に存在する大学である。

例えば、東北芸術工科大学では、ホームページづくりを通してインターネットを身近なものにしてもらおうと、学内を市民に開放、市民と学生が共に学びあう場として寺子屋方式の「ネットフォーラム」を開設している。県内あちこちに意識的な拠点をつくり、それをつないで地域全体を強力な情報発信力を持つ存在にすることが狙いという、情報デザイン学科の端山貢明教授に、フォーラムの様子を見せていただいた。



モダンな建物が目をひく東北芸術工科大学

「多様な年齢層の人々が集まって、社会の情報化を考える場に」との趣旨で始まったこのフォーラムは、今年で三年目になる。週に一回のこのフォーラム、当初は授業の一環として行っていたので学生たちには単位を与えていたそうだが、準備期間を過ぎた今年からは、一般市民や学内職員と同じく学生たちも自由参加になった。当然、参加者は少なくなつたが「それだけに、意欲のある学生たちばかりですから、期待できますよ」と端山先生。毎年、中高年を中心に少なからぬ市民の参加があつたが、今年は「子どもと一緒にインターネット」とテーマを決め、小学生とホームページづくりをすることにしたので、フォーラムへの市民の参加は小学校の先生のみとか。

編集部



助手の前川先生が細かく助言やヒントを出してくれる



仲間同士で教え合いながら



学生と話し合う端山教授

しかし、フォーラムOBたちは、何かと口実を設けては端山研究室を訪れてくるそうだ。

ホームページをつくる楽しみ

大学は、山々にぐるりを囲まれた山形市を一望する高台にある。午後五時三十分。雄大な景色に見とれながら門も塀もない大学構内に入り、指定の教室を訪れる。すでに九人ほどの学生さんたちが、ずらりと並んだマツクの端末に思い思いに向かっていた。靴をぬいで上がる教室が面白い。やはりコンピュータは特別なのだ。ここにはなんと、富士ゼロックスのLANが採用されていた。教室にはもう一人、助手の前川道博先生がいて、学生たちの面倒を見ている。前回までにホームページの基礎知識を教わっていたので、きょうは実際の制作とその発表というプログラム。この日のために、わざわざおじいさんが食べどきを合わせて摘んでくれたという見事なサクラボを、一人の女子学生が差し入れてくれる。さすが山形ですねえ。

さつそく甘くておいしいサクラボをいただきますながら、お二人の先生についてみんなのディスプレイを見てまわる。スキャナーで写真を取り込むのに苦労している学生には、「ビデオで取り込んだほうが早いし、きれいだよ」と前川先生がアドバイスしている。学生同士で教えあったり、先生たちのアドバイスを受ける仲間の周りに集まって一緒に話を聞いたり、和気あいあいとした雰囲気ながら、その熱気には圧倒される。とにかく先生も生徒も熱心、真剣。われわれのことなど、殆んど誰も気に止めていない。

合間に前川先生が、小学生たちが大学にやってくる、「芸工大を探検する」というテーマ

でつくったホームページを見せてくださる。これは小学生にデジタル・ビデオを持たせ、自由に構内を歩き回らせて、気に入った映像と感想を組み合わせて、一人一ページずつホームページをつくらせたもの。その斬新な映像感覚に驚く。子どももなかなかあなどれない。「パソコン画面の低い解像度がディテールを消すので、思わぬ映像表現となるんですね。それに、撮影にビデオを使うと、意図しない構図、意図しない映像が写っていて、それをページに載せてみると思いがけない発見があり、結構楽しめるものができるんですよ」と前川先生。

実は、このフォーラムのホームページづくりには仕掛けがある。ホームページを立ち上げたことのある方ならおわかりだろうが、ホームページをつくるにはHTMLという言語で記述しなければならない。何やらアルファベットや記号が組み合わさったその記述例を見ると、そのままですると後ずさりしたくなるようなシロモノなのである。細かくコマンドを打ち込まないと動かなかった、一時代前のあのコンピュータを思い出してしまう。そのHTMLの記述部分を自動化したり、映像の取り込みも簡単にするなどした、ホームページの自動生成ソフト「PopCorn」。「PushCorn」を前川先生が開発。このソフトを使って、小学生たちも自分の力でどんなホームページをつくることのできたし、学生たちもこのソフトを使ってホームページをつくっているのである。このソフトはPDS（パブリック・ドメイン・ソフトウェア）、つまりタダで提供されている。前川先生は、インターネットの普及のためならケチケチしないのだ（次頁にアドレスあり。ついで

先生二人を囲んで講評が始まる



に毎年開かれる「山形国際ドキュメンタリー映画祭」でも前川先生たちがネットワーク部門で貢献している。

やがて空飛ぶ「冷やし中華」の日が……

学生たちのフォーラム参加の動機はさまざま。「ホームページの制作技術を向上させたかった」「多くの人と交流ができるから」「授業でいじっているうちコンピューターが面白くなり、さらに小学生とインターネットで交流できると聞いて」など。「パソコン嫌いだ、地元出身なので地域に貢献したくて」と悲壮な使命感に燃えた人や、「郷里の大分県姫島の案内ページをつくりたくて」という明確な目的を持った人も。中国からの留学生は「友人づくりのために」このフォーラムに参加したそうだが、いまではインターネットで世界の人々と交流できることに興味を抱いているという。夜九時を回ったころ、ようやく発表会。一



大学から山形の市街地を望む

人ひとりの端末の前に集まる。一応、どれも映像が主、それに説明や感想などがつくというつくり。作者が制作意図や撮影時のエピソードなどを語る。環境問題に関心のある学生のリサイクル・センター訪問記あり、旅行の印象記あり、家族紹介あり、島の観光案内あり。留学生の作品は、中国の友人に新宿を伝えたいと、わざわざ上京してビデオで撮ってきた「私の見た新宿」。市民に開かれた芸工大の学生食堂をアピールしたいと、お気に入り「冷やし中華」の映像を使って学食の紹介ページをつくった人もいた。それぞれ素直な映像ながら、興味を持った世界が生き生きと伝わってきて、予想以上に面白い。

学生たちも「ページがそれぞれみんな違って、それがすごく面白かったし、楽しかった」と、多様性の面白さを発見してはしゃいでいる。「インターネットはツールに習熟することが大事です。だから数をつくって慣れること。完成したものを載せようとしなくて、ホームページで何をやらいいかわからない人も、とりあえず画像を入れてみる。そうすると、自分の関心のあること、意図が明確になってきます。これがホームページづくりの面白いところですよ」と端山先生が総括して、この日のフォーラムは終了。これから、さらにそれぞれのホームページを完成させて、いよいよインターネットに公開の運びとなるらしい。「怖いけど、わくわくする」と語ってくれた学生もいた。

芸工大の学食の「冷やし中華」が世界に向けて発信される。考えてみれば、何とも愉快な図ではある。高度情報社会とは、とりあえずは何でもありの元気がつくり上げていくものなのかもしれない。



学食の「冷やし中華」を世界へ



メディアは地域の伝統もとりにこんでいく

旧市街で出会った高校生

